

を研究してきた。雪割りと雪踏みの特性を整理した研究成果の公表を準備している。

雪割りではこうした研究成果を基に、十勝農協連が運営する営農支援システム「てん蔵」を通じて、農家が雪

割り作業をする目安となる情報を提供している。

十勝農試の関係者は「雪踏みについても農家への情報提供につなげ、十勝の土づくりを支援したい」と話す。

更別でドローン農業実験 自動飛行し生育確認 販売会社やドコモ

2017年12月29日

【更別】ドローン（小型無人飛行機）販売の「エアステージ」（釧路管内弟子屈町、久保直人社長）が、村内でNTTドコモなど複数の企業や東大の特任教授と連携した農業の省力化に向けた実証実験に取り組んでいる。ドローンに特殊なカメラを取り付けて農作物を撮影し、生育状況を視覚的に把握するシステム開発が核となる。将来的にはシステムとドローンやトラクターを連携させ、農薬や肥料散布の自動化などをを目指す。

エアステージは、中国のドローン製造大手「DJI」の販売代理店。ドローンを使った農業課題の解決策に取り組むため、村内の旧十勝南部農業開発事業所内に研究所を設けた。村更南の農業、岡田昌宏さんが所長を務めている。

実証実験では、光合成が活発な植物が太陽光のうち近赤外線を反射する性質を活用。改造したカメラをドローンに載せ、撮影した画像データをタブレットなどの端末で見られるソフトウェアをNTTドコモの協力を得て試作した。

来年度の実用化目標

実証実験は10月に岡田所長が働く岡田農場の畑で行われた。スマートフォンで指示した場所への自動飛行を実験しながら、農業者の視点を加えて改良を進めている。

来年度の実用化と販売を目標に掲げる。

また、生育状況の可視化に加え、農作業の省力化も研究する。GPS（全地球測位システム）を活用してトラクターの運転支援するスマートフォン用アプリを開発した農業情報設計社（帯広市、濱田安之社長）と協力。トラクターの自動運転化も念頭に、生育状況に応じて肥料の量を変えられるシステムの構築を目指す。

さらに、農薬製造販売で道内最大手のホクサン（北広島市）と共同で、現在は種類が少ないドローン散布に適した農薬の試験・登録に取り組む。把握した生育状況を活用し、自動航行のドローンが必要な場所だけまくなど散布方法の研究に乗り出す。

久保社長は「生育状況を把握した上で、いかに農作業の自動化や省力化につなげていくか、ドローンを使ったソリューション（解決策）を見いだしたい」と話している。

十勝農試開発 煮ても赤い豆 「きたロッソ」品種登録

2018年1月16日

【札幌】道立総合研究機構は15日、十勝農業試験場が国内で初めて開発した道産赤インゲン豆の新品種「十育S3号」が、新品種名「きたロッソ」として農水省に品種登録されたと発表した。これまでは輸入豆が多く使われていたサラダなどの洋風料理で、今後は道産豆・きたロッソを使用するケースが増えそうだ。

開発を担当した十勝農試豆類グループの斎藤優介研究主任によると、サラダやスープなどの料理では赤い色素の豆を使うことが多い。国産豆では大正金時が主に使われてきたが、煮ると赤い色素が抜け、煮崩れすることが多いことから、輸入の赤インゲン豆の需要が高かった。

研究では、大正金時の食味を生かし、調理後の見た目を赤色に保つことを主題に進めた。道産の大正金時を親に、赤い色素が水に溶け出さない種類のインゲン豆を掛け合わせたところ、赤色を維持し、煮崩れしない新品種「十育S3号」の開発にたどり着いた。

輸入品に比べると、道産ならではの食味に優れている上、調理後の外観も保たれており、缶詰やドライパックを試作した食品メーカーからは「色がきれい」「風味が良い」など、評価する声が寄せられたという。

昨年1月に完成した新品種は、道の優良品種に選定された。同12月には農水省の品種登録で公表され、品種名は「きたロッソ」に決まった。

斎藤研究主任は「サラダなどの料理では道産豆の需要が高かった。十勝を中心に全道の豆農家に種を作ってもらい普及させていきたい」と話している。